

# プレスリリース

2018年 3月 20日

国立大学法人千葉大学

国立研究開発法人海洋研究開発機構

国立研究開発法人国立環境研究所

気象庁気象研究所

## 気候の自然変動が大規模森林伐採による二酸化炭素の排出を 相殺した現象を世界で初めて検出！ ～東南アジアの生態系によるCO<sub>2</sub>排出量が2000年代に減少した原因を解明、 地球温暖化現象の理解に向けて新たな足掛かり～

千葉大学環境リモートセンシング研究センター近藤雅征特任助教が率いる国際研究グループは、東南アジアを対象とした陸域炭素収支解析から、1980年代-1990年代の強い二酸化炭素（以下、CO<sub>2</sub>）排出傾向が、2000年代において大幅に緩和されたことを発見しました。また、その原因が、2000年代に強いエルニーニョ現象が発生しなかったことに起因し、生態系によるCO<sub>2</sub>吸収が増大し土地利用変化によるCO<sub>2</sub>排出を相殺したことが大きな要因であることを解明しました。本研究は、国際社会の懸念事項である森林伐採・劣化によるCO<sub>2</sub>排出が、自然変動によって大きく緩和されたことを世界で初めて示した事例です。本研究結果は「Nature Communications」（Springer Nature）2018年3月20日版に掲載されます。

詳細は[千葉大学のサイト](#)をご覧ください。

国立研究開発法人海洋研究開発機構

広報部 報道課長 野口 剛